『女盗賊砦２』
女だからってなめんじゃねーぞ！
女盗賊が態度の悪い男盗賊らに金責めお仕置き！ついでに逆レイプ！

玉子王子　著

一章　トイレ覗きにキ〇タマ潰し

　山の上に立つちょっとした屋敷。

　そこで男女五十人ずつが宴会を開いていた。

　そのうち、十人ほどの女たちが立ち上がる。

「姉ちゃんたち、便所かい！？」

　ボロボロの着物を着た男。というか、綺麗な着物を着たものなどいない。ろくに洗濯もしていないらしく、臭う。

　女たちのほうは、ぼろいのはぼろいが、洗濯はしているし穴があれば繕ってある。

　女たちも盗賊であるとはいえ、男盗賊たちとはやはり違うものだ。

　この場所は男たちが根城とする放棄された山城を再利用している砦であり、料理なども彼らが近くの村人に用意させたものだ。

　それらの皿とともに、刀や槍も転がっている、盗賊団同士の宴会らしい雑然とした風景。

　これが武家同士の宴会なら、同じように武器に親しんでいるとはいえ、宴会場に槍が転がっていたりはしないだろう。

　別に盗賊たちは争っているわけでもないしそのつもりもない。

　ただ、管理がいい加減なだけだ。

　部屋を出ようとする女盗賊たちに、近くの男盗賊がニヤリと笑いかける。

「クソ？　姉ちゃんたち、クソなの？」

　適当に笑ってごまかす女盗賊たちだが、食い下がる男。

「ねえ、クソなの？」

「いやあ」

　頬を引きつらせながら笑いつつ、その場を出ていく女盗賊。

　先頭は、彼女らが属する女盗賊団松木党の幹部であるお菊。

　便所、といってもこの山城の中にある屋敷は普通の男の盗賊団の砦なので、小便となるとその辺でやってしまう。大専用のちょっとした個室が並んでいるに過ぎない。

　女盗賊たちは、それに順番で入る。

　待つ者たちは、みな不機嫌そうだった。

「ったく、やってられませんよねえ、お菊姉さん」

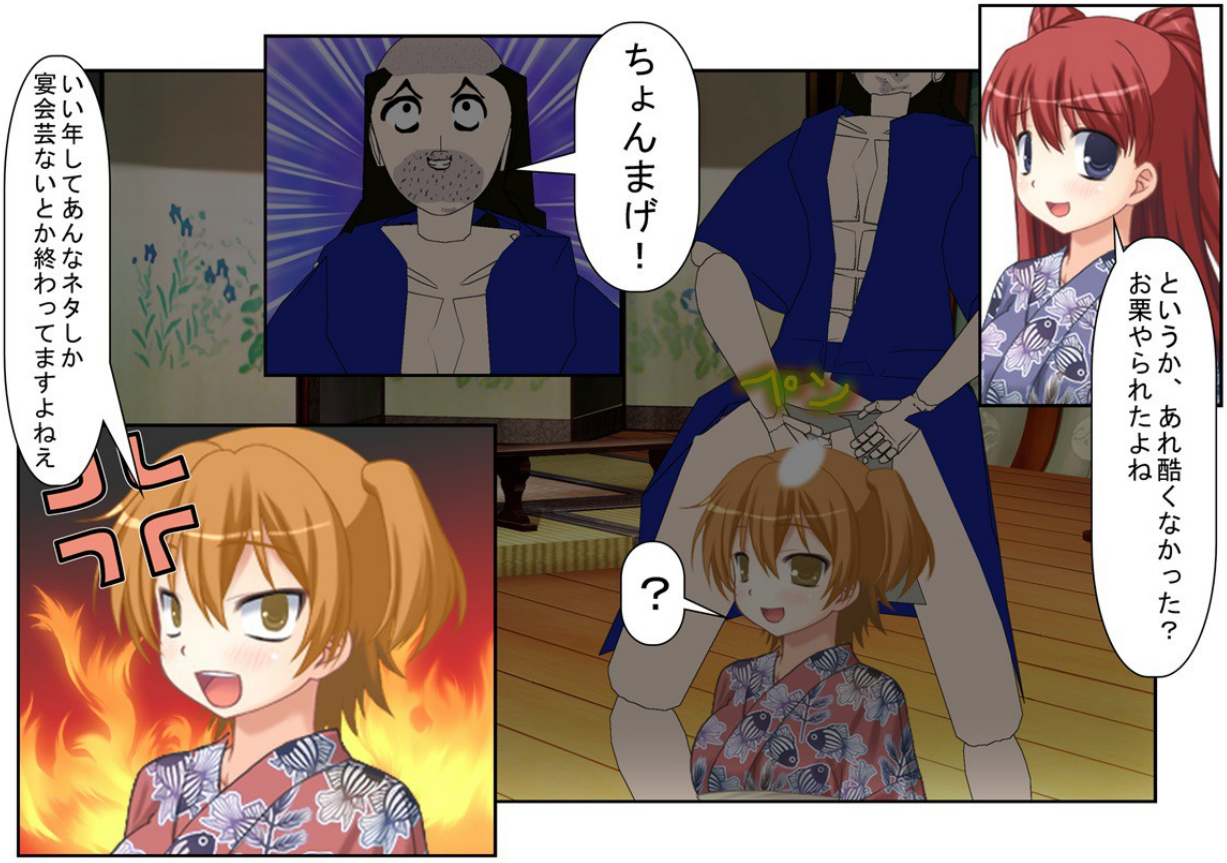
　若い娘。

　最近やっと新人が入り、一番若くはなくなったお栗というもと神社の娘。

　といっても、やはり一番若いグループではある。

「というか、あれ酷くなかった？　お栗やられたよね」

「あー、宴会芸。いい年してあんなネタしか宴会芸ないとか終わってますよねえ」



若いが、年老いた猫のようなおっとりした雰囲気があるお栗。

それが眉を吊り上げ、頭を撫でる。

「ちょんまげ、だもんねー」

「ぎゃはは、そうそう、おチン〇ンお栗の頭にのせて」

「**出家させたろか**、と思いましたよアレには」

チョキチョキと指でハサミの形を作るお栗。

「っていうか、あの人こう……すごい腰突き出してなかった？」

「あー、それな！」

「**そんな小さいちょんまげねーよ**、って思ったもん。あんた自分の頭のちょんまげと、**股間のちょんまげ**比べていわかんねーのかよって」

「ある意味根性あるよねえ、あんなチ〇ポで「ちょんまげ」だもんね」

「金の玉はチョイ立派だったけどね」

「埋もれてたもん、ちょんまげが」

なんだかんだ言っても、女たちに受けていたといえるかもしれない、盗賊が身を挺して行ったちょんまげ芸は。

時は戦国時代……。

我々の世界のそれより巨大な伊豆半島の南の部分、後にうさぎ県と呼ばれる土地、この時代は北は上兎（かみうさ）と南は下兎（しもうさ）と呼ばれていた。

上兎は温泉や金鉱があり、農業にも向いた豊かな土地。

一方で下兎は後にアゼルバイジャンやベネズエラにある物と並ぶ巨大油田が見つかる土地だけに、古来より地面から燃える水が湧くために農業がしにくい貧しい土地だった。

とはいえ、荒廃しているわけでもない、他国と比べればあまりいい感じではないというだけだ。

そんな下兎のとある土地の放棄された山城の一つに、松木党と名乗る盗賊団が巣くっていた。

人数は百人ほどのパッとしない集団だが、一つだけ周りの盗賊団と違う部分があった。

それは頭をはじめとする全員が女、という事だ。

女だけとなると、荒くれの他の盗賊らに舐められ、渡り合っていくのになかなか苦労させられている。

とはいえ、多少舐められることは合っても基本は大体は仲よくしており、今も近くの盗賊団と交流のために宴会に呼ばれていた。

来週は彼女らが呼ぶ側だ。

近隣のいくつもの盗賊団が外部からの自衛とお互いでの潰し合いを避けるのに緩い同盟関係を結んでいる。

縄張り争いが起こる事もあるが、死人や怪我人が出ないようにルールをもって行うぐらいだ。

チラ、とトイレを見るお菊。

長方形の建物。

入り口が五つあり、布が扉替わりという酷い構造。

それがポンと曲輪と曲輪の間の堀の上に出張り、出したものが堀に落ちる仕掛けだ。

安普請なので、大風でも吹けば建物自体堀に落ちそうである。

個室は五つ、真ん中が初めから誰か入っていて、残りの四つに女たちが入っていく。

紐で下げられた布が閉まる。

風で捲れる不安なものだ。

だから女たちは集団で来て、間違っても後ろに男盗賊が並んだりしないように監視しあっている。

とはいえ、そんな覗きに来る男はいない。見える範囲にはいない。

いるわけがない、見つかればとんでもないことになるのだから。

それはもう、とんでもないことになる。

男女の体で明白に違う部分に攻撃が集中することがわかっているので、普通の男なら女盗賊のトイレを覗こうとは思わない。

だから見張りといっても、立っているだけだ。

伸びをするお菊。

「あー、もう漏れちゃうよ」

「どっちですか？」

「あんたまでそんなこと……山か川かで言ったら、川の方よ。女って不便よねえ、いくら盗賊だって言っても、その辺でしゃがむわけにいかないもん」

「ですよねえ。男人ならポロリで行けるのに」

「んー、なにをポロリするのかな？」

「えー、なんですかそれ」

「処女にはきついかな？　**穴もきついことだし**」

「うわー、最低のネタですねえ……。穴か棒かで言えば、棒を出すってことですよ。お菊姉さんにならって、比喩的に言えば」

「比喩でもなんでもなくね？」

待っているうちに女たちが個室から出てくる。

ふと、妙なものを感じるお菊。

「ちょっと……真ん中の人遅くない？」

「ん……もしかして」

覗いているのでは、となんとなく不安になる女たち。

あー、誰か入っているなと思っていたが、よく考えれば自分たち以外はこの男盗賊団の人間なのだ。

壁に穴でもあればあっさり覗かれる。

「まさか、壁に穴でもないでしょうね」

「もし誰か入ってて、穴でも開いてたらどうします？」

「あは、決まってんでしょ？」

足を開き、着物の股をパンと叩く。

「ここ、集中攻撃」

「きゃ。やっぱり」

顔を赤らめるお栗、周りの女たちもにんまり。

それを見て、ギュッと何もない股座を握るお菊。

「みんなで蹴りまくって……潰しちゃお、男の大事な……き・ん・の・た・ま。ゴールド」

南蛮人から様々な道具、文化、言葉が入ってきている時代である。

「あは、ですよね」

この世界では、実に不思議なことに男性器の損傷を瞬く間に再生させると同時に、女性の場合は男性器への攻撃に性的興奮を覚えやすくなるという、謎の細菌がすべての人間に広まっている――すべてといっても日本国内だけの話だが、それはお菊らにとって全宇宙と変わらない範囲といえる。

睾丸が潰れようと、陰茎を切断されようと、アッというまに治ってしまうのだ。

とはいえ、男なら自分が同じようにされるのを恐れ、文字通りの紳士協定でそこへの攻撃はお互い自重する。

が、女なら自分に付いていないだけに、遠慮が全くない。

つまりは、お菊が言っているのは「攻撃しちゃおうね」というのを大げさに表現しているわけではない。

ガチ去勢、という事だ。

それも治るのをいいことに、気が済むまで去勢を繰り返す気である。

彼女らは女盗賊などしているが、基本的には優しく常識ある女性たちだ。

決して、治らないなら睾丸など潰さない、潰れたら怖いからと攻撃もできないぐらいの女性たちなのだ。

しかし、「治るよ」の一言は彼女らの急所攻撃へのリミッターを瞬時にゼロにする。やはり付いていないという体の違いは大きい。

「……っていうか、扉が布なんだから……っていうか、もはや扉がどうとかいう話じゃなくてただ目隠しが布、ってだけなんだからさ……」

足音を殺し、便所に近づく。

真ん中の個室の、閉まっている布の下を覗く。

誰もいない。

「あ、なんだ……」

サッと布を開ける。やはり誰もいない。

「閉まってただけだわ」

「なーんだ」

「残念ですねえ、変態さんのおキ〇タマ、ゴリンゴリンに潰しまくりたかったのに」

笑いあう女たち。金潰しで笑えるのは、それが付いている者が一人もいない集団だからだろう。

真ん中の個室に入り、布を閉める――といっても目隠し程度の話だが。

着物を緩めるような動きをしつつ、なんとなく横の壁に穴がないか見る。

――ないわねえ……そりゃそうか、便所覗くような変態野郎なんてなかなかいないもんね。ぶっちゃけレ〇プとかならまだわかるわ。やりたいでしょうねーって。でも便所覗く意味はガチで不明だっての。便所覗いてチ〇ポ立っちゃう変態野郎なんてタ〇キン潰したほうがいいのよ。十回位潰してやれば、トラウマになって覗きやめるかもだしね。

しゃがむ。

いや、しゃがむ前に気づく。

便所は言ってみれば二階建てであると。

上が便所、下は便所が平地にあった時、出したものを掃除するための空間として作られたものだ。

この山城を作ったどこかの大名が作った便所だ。

が、掃除が面倒なので、野盗らは建物丸ごと曲輪の端、出したものが堀に落ちる場所に移動させたわけだ――それはそれでかなり面倒だが、継続的な掃除より楽とみた。

曲輪端の斜面に配置したので、便所に入る側からは下の段が見えない。

正確には見えるが、あまり意識されない。

意識されないが、見えていないわけではない。便所が斜面にあり、下に空間があることは外から見ればわかる。

便所の入り口はしっかりと斜面に引っ付いてはいない、つけるには斜面を削らねばならず、面倒なので空間が空いている。

地面から便所まで、板を渡している形だ。

足元に注意して便所にはいれば、下の階が目に入る。

覗きについて考えているうちに、お菊はそれを思い出した、もしくは意識した。

意識して、さっと青ざめる。

――いやいや、まさかここに誰か潜んでるとか……んなホラーみたいな展開嫌すぎるでしょ。

頬を引きつらせつつ、床の穴……子供なら落ち込むような穴に顔を近づけ、中を覗き込む。

便所のその部分に潜み、刀を突き上げるという暗殺法があるらしいが、ともかくその空間を覗くお菊。

下に潜んでいた盗賊と目が合う。

ニヤ、ともう笑うしかない盗賊。

「あ。いや、俺は掃除を……」

「ひぎゃああ！」

顔を引き、絶叫するお菊。

個室から飛び出す。

個室と地面をつなぐ板がドカンと音を立てる。

文字通り転がり出て、唾を飛ばして頭を振るお菊。

「いた！　いたっ！　掃除かなにかの、便所の下の空間に……男がいた！」

「うっそ！」

「キモ！　キモ！」

「男がいた……かあ、すぐ**元男にしてあげようね**」

男が堀に降りる。

下の部分にはさらに下に出したものが落ちる穴とともに、横から掃除のために入る場所があるのだ。

本来はその下の穴がなく、横から入って物を取りだす構造というわけだ。

堀を転がるように走る盗賊。

堀は侵入者を排除するためのもので、楽に走れるものではない。

ただ、この山城は古く、角が崩れて土がたまり、角度が甘くなっている。ただの山に戻りつつあるのだ。

だから何とか走れる。

それは、追っ手も走れることを意味する。

目を血走らせ、変態を追って喚き散らす女たち。

「おらっ！　まてや変態野郎が！」

「濡れ衣だ！　掃除してただけ！」

「掃除要らない構造でしょうが！」

一人の男を追う一〇人の女盗賊。

対面の曲輪に駆け上がろうとして、足が滑って転げ落ち、堀の底に落ちる。

落ちるというほどのこともない、転がっただけだ。

追いついてきていた女盗賊らがそこにいなければ、すぐ立ち上がれただろう。

「掴まえた！」

「変態野郎はどうしてくれようかな？」

「ま、まて、お前ら友好関係結ぶために来てるんだろ？」

「この展開であなたのタマタマを潰したからって、あんたらのお頭が何か言うとは思えないんだけど？」

「ひ、玉って……正気かよ！」

「正気よ。タマタマは潰れても治るんだから」

「いや、そりゃそうだけど……治るからって臓物潰すか？　はひっ」

「きーん！」

ペン、とお菊の掌が変態盗賊の股間を掬うように払う。

ぐにゅり、と細い指が自分の一番攻撃されたくない部分を押し潰していったことを感じ取る盗賊。大した力ではないことも一瞬で察知する。しかし、場所が場所である。一瞬後、痛みが脳天を直撃する。

「ちょ……おんんん」

唇を噛み、仰け反る。

男なら誰でも同情する姿。

しかしその場には女しかいなかった。他人事に、噴き出す。

「はひっ、だって！」

「へコっと腰引いちゃって……」

「ぬんんん……」

股間を押さえ、汗を噴出させる盗賊。

背丈では高いが、頭を引いているので見下される形になる。

見上げる盗賊。見下ろす女盗賊たち。

股間に弱点を持つものと持たない者の格差がわかりやすくあらわされた形だ。

　目じりを下げ、片頬を引きつらせ、あからさまに嘲笑の表情をする女盗賊たち。

「あは、だっさー」

「キンキン痛いですか？　お菊姉さん全然軽くやったように見えましたけど」

「仕方ないのよねー、無敵を誇る男性様でも、たとえ相手がか弱い女の子でも……男子の急所、きゅーしょである、おキンキーンをやられたら、へこっ！　はぐう！　で腰引いて……あ、そうそう、ほら見て、腰振りだした！　キ〇タマダンス！」

　腰を引き、尻をグネグネと振るというか回す男を囃し立てる女たち。

「やだ、女の子にやられて情けなーい」

「あんたそれでも、キ〇タマ付いてんの？」

「踊れ！　踊れ！　男はみんな玉蹴られて踊れ！」

「くううう」

　顔を赤らめる盗賊。肉玉がキュッと引き締まるのは急所痛だけが原因ではない。

　――畜生、女に見下されて、玉ついてるかなんて……ああ、笑われてんのに腰が動いちまう……あの女、軽く軽く……でもギリギリ男が耐えられない力で叩きやがった……どんだけ金的に慣れてんだよ……

　盗賊の後ろに女二人が回る。

　そして腕をつかみ、引き離す。

「あ、まて」

「はいはい、急所ガードという**男らしい行為**は一時中止ね」

「ぎゃはは、マジで股間押さえる格好って、**ザ・男。**だよねえ！　女は絶対あんな恰好しないし。まあ隠すぐらいならね？　でも守るなら顔とかお腹でしょ？」

「男は大変だよねー、お股にゾーモツぶら下げてるから！　ゾーモツ！」

「お、お前らいい加減に……」

　顔を真っ赤にして目を吊り上げる盗賊。

　真剣に怒っている。

　しかし股間を押さえて凄まれても、女盗賊たちは笑うしかない。

「やだ、女の子におキンキンをやられて膝締めてなにいうつもり？　変態トイレ覗き野郎が」

「態度がデカいときゅーしょ蹴っちゃうよ？　キ〇タマ蹴っちゃうよ？　いいの？　痛い痛ーい、キ〇タマキックだぞ、キ〇タマ！」

「私たちみんな、おキンキンを持たない女の子だから、手加減できるかわかんねーなー」

「ま、もし潰れちゃっても治るからいいよね？」

「や、やだ……治っても嫌だ！　ざけんな玉無しども！　お前らにキ〇タマの大事さが……はふっ！」

「はいキーン」

　お菊の膝が、ぐちょ、と盗賊の股の間の肉を押し上げる。か弱く華奢な女性の膝であるが、睾丸とでは強度でも耐久性でも一万倍ぐらい違いそうだ。腰骨に押し付けて球体を押し潰さないようかなり手加減し、浅く蹴り上げている。

　加減して加減して、それでも「男だから耐えられない」というのを見下すのが金的嘲笑の楽しみだと百パーセント理解している**玉責め巧者お菊**である。

　周りの女たちも囃し立てる。

「おーっと！　お菊姉さんの高速キ〇タマ蹴り炸裂ですね！　か弱い女の子の膝と、頑強な男の人のおキ〇タマ……どっちが勝つか勝負ですね」

「ふんぐおおおおおおおお」

　手を離す女たち。再び股間を押さえる盗賊。

　柔らかい土に膝をつき、顔から地面に突っ込む。

　噴き出す女たち。

「きゃは、倒れちゃった」

「はい、あっさりとおキ〇タマの負けー」

「ちょっと加減しすぎたかなあ、と思ったんだけど、思っただけだったわね」

「キ〇タマ弱いわー、男は弱いわー」

「タマタマさえなければ、男は無敵なのにねえ」

「いや、タマタマないと男じゃないじゃん」

　笑いつつ、男を抱える女盗賊たち。

「どこに連れて行きますか？」

「向こうの使ってない曲輪にしよう。こんな堀の底じゃ楽しめない……じゃなくて、お仕置きしづらいからね」

　男一人担いで堀を上がるのは大変だが。崩れているのでまあどうにでもなる。

　曲輪の上の平地に転がされる盗賊。

「ふぐっ」

「あは、痛かった？」

「衝撃が玉に響くううう」

「ぎゃはははは！　何それ！？」

「ダメージで弱ってるから？　それとも元からタマタマはそのぐらいクソザコなの？」

「このぐらいなら動けない……とかは経験でわかるけど、やっぱり結局のところ、私ら女だから、付いてない物のことはよくわからないわね」

「潰れちゃってるかもしれませんよ」

「あ、いいところに気づいたね。大丈夫か確かめてやるよ」

「え、ちょ……」

「足開け、足！」

「玉蹴るぞ！」

「やめ……」

　両足を別の女に捕まれ、開かされる。膝金蹴りで倒れた状態の盗賊である、逆らう力などない。

　開かされる。褌に女たちの手が伸びる。

「やめろ……」

「やめませーん」

「御開帳」

「おほ、ご立派」

　ブラン、と揺れる肉の棒に女たちの目が輝く。余裕でむき出しの赤黒い先端部が女たちの目線を集める。

「結構立派じゃん」

「やっぱ変態野郎はチ〇コがデカいのね」

「キ〇タマキュンキュンに縮んでるから、竿もそうだろうに」

「並みの立ってるのより、この状況でデカいって結構なもんね」

　一物のサイズを女たちに褒められる。

　冷静に考えれば「だから何」という話という気もするが、男はそれが心から嬉しく感じてしまう生き物である。

　金的の痛みも多少は忘れ、頬を緩める盗賊――トイレ覗きがばれて金的の上にフルチンにされて笑っている場合ではないだろうが。

「へ、へへ、そうだろ。俺のデカいんだ、なんなら、お前ら全員俺に自慢の」

　言葉が終わる前に、パシ、と軽く足の甲が巨棒の根元を弾くように当たる。

　ぐにゅ、と腰骨に押し付けられ、運よく玉がつるりと滑る。いや、ゴリっとだろうか。

「ぐむっちょおお」

　膝を締めようとするが、足を左右に引っ張られていてはそれで防御など無理だ。

　大体、お菊は足の間に立っているのだ。

　防御不能で、金的蹴りを食らう、しかも相手は玉の痛みが一ミリもわからない女……という男として最悪の状況。

　お菊は、満面の笑みである。

　その笑みを見上げると、盗賊の恐怖と絶望はさらに高まる。

「ふんぐううう」

　――だ、だめだこいつ、俺が痛がる姿見て……心から楽しそう……だめだ、玉が潰れたら治らないなら、少しは加減もしてもらえるだろうが、潰れても治っちまう上に「変態野郎にお仕置き」という名分があるからには、こいつは潰す、容赦なく俺の玉を……

「はぐっ！」

　考えている時間など、与えてくれるお菊ではない。

「急所をキック急所をキック、変態野郎の急所をキック」

パシパシパシパシと、景気よく蹴り続けるお菊。

「ちょ、ま、やめっ、あぐっ、ほぐっ、あひっ」

「はいはい、お手手はこっちね」

「膝が開いたり閉じたり必死」

「そりゃタマタマ守るためならねえ」

「あおおおおお！」

「そらそら、こんな軽い軽い蹴り……っていうかこんなん蹴りじゃねー。足当ててるだけでしょうが。大げさなのよあんたらは。ったく、金の玉に関しては、男って大げさだよねえ」

「きゃはは、おチン〇ンプルンプルン揺れまくってますよ！　鞭みたい！　おっきいですね！」

「ああああああ！」

顔を赤らめ、股間を見下ろす女たち。手を押さえ、足を掴み、数の力で男を無力化。しかし別に大して力を入れているわけでもない。

度重なる金的で、暴れるわりに大して力が入っていない男。

「おぐおおおおお！」

――やめてやめて、ああ、ちくしょう！　ふざけやがって！

見る。蹴ってくるお菊の股間を。

着流しの前がはだけ、下着が見える。

どんな短小の男の股間よりもフラットな女の股間。

――ちくしょう、卑怯な……自分は玉がないから、仕返し恐れず一方的に蹴れるなんて……この痛みを一生味あわないでいいなんて……**女なんて虫けらみたいなもん**だが、股間の強さだけは、唯一男のほうが劣る……

と、蹴りを止めるお菊。

着流しの前を開いて見せる。

「見てた？　見てたよね、女のここを」

「あは、うらやましいんじゃないですか？　だって私たち女は……どんなに油断してても、絶対、お股には急所攻撃を受けないんですから。だって……うふふ、ボールがないんだから。弱点ボールが」
「う、うらやましいだと？　そんなわけあるか、チ〇ポの一つもない……あああ！」

「きーんきーんきーんきーん」

パンパンパンパンパン、多少先ほどより力を籠め、股間を蹴り込むお菊。

「あぐおおおおお！」

「ほらほら、こんな感じにパシっと蹴ってすぐ足を引く。次の蹴りのためでもあるけど、玉って腰骨に押し付けたら結構簡単に潰れちゃうから、手加減は「深く蹴り込まない」感じでするのよ」

「えー、でもそれじゃあんまりダメージ……あは、あるわね、すんごくのたうち回ってる」

顔を赤らめ、男の頭の左右にしゃがむ新人二人。

頬を撫でつつ語り掛ける。

「痛い？　痛いの？」

「ぎゃははは！　スンゲー顔してるよこいつ！　タマタマ痛ーい！　死んじゃう！　男の大事なキ〇タマつぶれるう！　女の子様お許しを！　お許しを！　タマタマの痛みは、女の子様も経験したことあるでしょ？」

「ぎゃははは！　ありませーん！　だって玉ないもーん！」

バシバシと、自分たちの股間を叩く女たち、興奮しきっている。謎の細菌の力によって、男は男性器を再生され、女は男性器への攻撃に性的興奮を覚えるのだ。

左右の女の股間叩きを見て、頬を引きつらせる男。

――ひい、あんな勢いで……正直、今このくそ女が蹴ってきてる力と変わらない力で叩いてねえか？　何ともないのか……マ〇コは強い、キ〇タマは弱い……ああ……

のたうつ男。左右に振り回される巨根。根元にパンパンと叩きつけられるお菊の足の甲。

「そらそら！　余計な弱点ぶら下げた、出来損ないの玉あり股間にお仕置きだよ！」

「やれやれ！」

「いいぞお菊姉さん！」

「変態野郎のキ〇タマ潰せ！」

「あはは、そんな蹴りでこんなのたうち回るんだ！」

「女にその反応させるのは責めるほうも大変だけど、男なら「きーん」で一発。コスパ最高だよね」

一様、使われている曲輪から離れて騒いでいるお菊たち。

しかしさすがに、彼女らが帰らないことに気づいた人間が便所を見に来て、その対面の曲輪にいる彼女らを見つける。

「いや……何してるのあの子たち……」

鼻の上から頬まで一筋の刀キズがある女。松木党の頭であるお松。

目つきの鋭い、知的そうな女。目を細める。

――うわ、遠目にもタ〇キン楽しそうに蹴ってるのがわかるわ。いや、そりゃタマタマ蹴りは楽しいよね？　普段威張り散らしてる**男性様**を、その男特有の部分を軽一く責めるだけでのたうち回らせることができる……女である事に優越感を感じて濡れるのはわかる。でも今やる？

「強引に口説いてきたからキ〇タマ潰し……ってわけじゃないよね？　友好関係築くための宴会でそれはやり過ぎでしょ」

頬を引きつらせる。

その程度で済むのは自分に蹴られるものがない**上級国民**の余裕である。

横にいたこの砦の盗賊団の頭は真っ青になって股間を押さえる。

「ひい、あいつら何を……おい！　お前らこい！　大変だ！」

「あ……ちょ……仕方ないわね……みんな来なさい！」

両陣営が人を呼び集める。

結果、男女五十人ずつが険悪に向き合うこととなる。

体験版終わり

この後、なし崩しで激突する男女の盗賊。

男女間の争いとなれば、当然女たちは男の泣き所を集中的に狙ってきます。

当然のようにボロ負けの男盗賊。

金的で興奮した女盗賊たちは介抱名目で褌を脱がせた男盗賊らを逆レイプします。

続きは製品版でぜひお楽しみください。